

氏名	新堀 歆乃
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第160号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉ご詠歌諸流儀の成立過程 －1920年代以降の仏教教団による布教活動と音楽伝承－
論文等審査委員	
（論文審査主査）	東京芸術大学 准教授（音楽学部） 塚原 康子
（論文審査副査）	” 教授（ ” ） 根木 昭
（ ” ）	” 准教授（ ” ） 植村 幸生
（ ” ）	” ”（ ” ） 杉本 和寛
（ ” ）	武蔵野音楽大学 教授（ ” ） 薦田 治子

（論文内容の要旨）

本研究は、ご詠歌という日本の宗教音楽を対象にその諸流儀が成立した過程を、仏教教団による布教活動と音楽伝承という2つの側面から明らかにするものである。

ご詠歌は主に仏教に関わる内容の歌詞を持ち、民謡などに似た節を付してうたわれる。うたい手の多くは一般在家の仏教信者で、四国遍路などの巡礼や葬式などの仏教儀礼でこれをうたう。また、ご詠歌には日本の諸芸能と同じように様々な流儀があり、これらの流儀は家元制度に似た伝承組織のなかで伝えられている。

現在に伝わる諸流は1920年代以降に成立したものであり、そのうち本研究では成立の最も早い大和流とそこから分派した金剛流・密厳流の3流を取り上げた。考察の視点は4つあり、1. 各流儀の特徴とその成立過程、2. 仏教教団の布教活動とご詠歌の関係、3. ご詠歌の「伝統」を創出する過程、4. 流儀を伝える楽譜と口頭伝承の関係について各章で論じ、全4章を構成した。

第1章では、ご詠歌の流儀を特徴づけるものとして創始者・伝承団体・レパートリー・演奏の機会・音楽理論・伝承組織・伝承方法に着目し、研究対象とした3流それぞれの成立過程を概観した。各流儀に共通する特徴として1. 楽譜の作成、2. ご詠歌のうたい手を格付けする階級制度の設置、3. 全国奉詠大会の開催という3点を指摘することができる。とりわけ2. 階級制度の設置は、各流派（伝承団体）が全国展開を果たす上で重要な役割を担った。なぜなら、ご詠歌の階級制度は日本の諸芸能に共通するような名取制度を備えた伝承の組織で、この組織により師弟関係の連鎖が生まれて伝承者の数を急増させ、流儀を全国へと広めることに成功したからである。

第2章では、1920～30年代に諸流の伝承者が急増して流儀が全国に普及したことの意味に着目し、ご詠歌が真言宗教団の布教用音楽として成立する過程を考察した。その方法として、浄土真宗が明治期に始めた仏教洋楽（西洋音楽の影響を受けた布教用の仏教音楽）と比較した。その結果、明治期の浄土真宗による仏教洋楽が西洋化を目指したものであったのに対し、大正末以降の真言宗によるご詠歌は近代以前からの既存文化を再編して近代化を図るものであったことが明らかになった。

第3章では、第2章で指摘したご詠歌の近代化について、その内実を明らかにすべく「伝統の創出」という視点からご詠歌諸流儀の成立過程を考察した。仏教教団は、それまで「乞食歌・俗謡」とみなされていたご詠歌を正統な「仏教音楽」へと位置づけるべく、その伝承組織（階級制度）と音楽的特徴（楽譜・音楽理論）を再編した。その結果、正統な流儀を意味する「正調」という概念が生じた。つまり、

ご詠歌の伝承者は階級制度や楽譜・音楽理論といったご詠歌の流儀を特徴づける諸要素のなかに「伝統」を見出し、それらを再編することによって正統な流儀すなわち「正調」を確立したのである。

第4章では、第3章の議論のなかで浮上した「正調」について「伝統の創出」とは別の角度から考察を試みた。ここではご詠歌の伝承行為に焦点を当てて「正調」を伝える楽譜と口頭伝承の変遷を確認した上で、保存や固定性への志向を促すような「正調」の存在と、それを伝達するための媒体である楽譜と口頭伝承が変容するという、一見相反する性質を併せ持った伝承のしくみを解き明かした。本章の特徴は、第一に、楽譜だけでなく録音資料からも音楽の変化を確認し、その変化の要因を参与観察および伝承者へのインタビューから実証したことにある。そして第二の特徴は、「伝統の創出」とは別の切り口から「正調」を論じることにより、これまで議論されてきた音楽の西洋化や伝統回帰という視点からは見えてこなかった近代化の一面、具体的には楽譜の導入を通じて音楽伝承が「声の文化」から「文字の文化」へと移行するなかで新たな「声の文化」が立ち現れた様子を描き出したことである。

以上のとおり、本研究では、仏教教団の近代化とそれに伴う音楽の近代化という全章を貫く主題のもとに、第1章でご詠歌諸流儀の成立過程を概観したのち、宗教実践としての側面から音楽実践へと論点を移しながら、ご詠歌という宗教音楽を様々な角度から論じた。具体的には、第2章で宗教実践としての布教活動とご詠歌の関係に着目し、次の第3章ではご詠歌の再編過程において階級制度が布教師養成システム・在家信者の修行課程として機能するようになった一方、楽譜や音楽理論が考案されて新たな音楽的特徴が創出されたことを指摘し、宗教実践と音楽実践の両面についてそれぞれ論じた。そして、第4章では音楽実践のうち伝承行為に焦点を当ててその実態を詳細に分析し、伝承のしくみを解き明かした。これら4章の考察を通して見えてきたものは、宗教として実践されるものでありながら同時に音楽としても享受されてきたという、宗教音楽としてのご詠歌のあり様である。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、ご詠歌という宗教音楽を対象にその諸流儀が成立した過程を、1920年代以降の仏教教団による布教活動と音楽伝承の2つの側面両面から明らかにした研究である。宗教実践と音楽実践というご詠歌のもつ両面性をふまえて、近代化の過程で意識された「伝統の創出」とそれに伴う「正調」の概念の成立、およびご詠歌伝承における「正調」と変容のしくみを考察している。

序章において研究の目的・対象・方法、先行研究を整理し、本論文の枠組みを示した。第1章では研究対象とした大和流・金剛流・密厳流の成立過程を概観し、各流儀に共通する特徴として、楽譜の作成、階級制度の設置、全国奉詠大会の開催の3点を指摘した。第2章では、大正末期以降の真言宗によるご詠歌（金剛流・密厳流）の成立過程を、明治期の浄土真宗による仏教洋楽と対置し、既存文化を再編して近代化を図った布教用音楽と位置づけた。第3章ではご詠歌の近代化を「伝統の創出」という視点から考察し、声明に淵源を求めた楽譜・音楽理論や階級制度の再編により「正調」の概念を生じたことを検証した。第4章ではご詠歌の伝承行為に焦点をあて、保存・固定化を促す「正調」の存在とその媒体である楽譜と口頭伝承の変容という、相反する性質を併せ持つ伝承のしくみを実証した。

これまでほとんど未開拓であった音楽としてのご詠歌の実態を、周到な資料調査と参与観察・インタビューに基づく綿密な分析を通して明らかにした本論文は、全体としてオリジナリティの高い画期的な成果であるとともに、ご詠歌研究を超えて、近代日本の宗教音楽史、ジャンル生成史等としても読まれ得る内容を備えている。また、「正調」とその変容に係る指摘は、無形の文化遺産の「保存」を考える上で、現行保護制度の「原形保存」のあり方に重要な示唆を与えるものでもある。

改善すべき点としては、①研究対象とした3流儀の選択理由とその比較をまとめて提示すべきこと、②流儀成立過程における「歴史の創出」も考慮すべきこと、③第3章のご詠歌の近代化概念図の「近代音楽」に、西洋化型ともご詠歌のような再編型とも異なるタイプが存在する点にも配慮すべきこと、④

徹底した議論を行ったことの裏返しとしてややくどい部分があること、等が指摘された。

しかし、博士の学位に値する優れた成果をあげたことには些かの疑義もなく、合格と判断した。